

気軽な助け合いができる社会をめざして

香川県 土庄町立土庄中学校 1年

篠原 和誠（しのはら かずなり）

僕は、生まれつき脳性まひという病気のため、車いすで生活している。車いす生活では不便なことが多いのだが、時々、温かい気持ちになることがある。

それは、毎週通っているリハビリに行くためにバスに乗ろうとした時のことだった。いつもは運転手さんが手伝ってくれるのだが、その日は、車いすに気がついた乗客のおじさんが、すぐさま、「手伝おうか？」と声をかけ、車いすを持ち上げてくれたのだ。バスを止め、かけつけた運転手さんも座席を上げ、車いすを置くスペースを作ってくれた。無事バスに乗れたことにほっとしていると、後ろに座っていたお婆さんが、

「これ、もらい物やけど食べて。」

とかしわもちを僕の手へ渡してくれた。一人暮らしだと言っていたお婆さんは、僕を見て、離れて暮らすお孫さんのことを思い出したのかもしれない。しかし、全く見ず知らずの僕に、こんなに優しくしてくれる人がいるのかと驚いた。思いやりは伝染するのか、こんなやりとりがあったバスの中は、いつもより穏やかな空気に包まれ、居心地がよかった。ほんの三十分ほどのできごとだが、僕の心も温かくなった。

この日は本当に気持ちのよい一日だったが、こんな日ばかりではない。バスや電車の乗客に露骨に嫌な顔をされたり、バスの運転手さんがうまく介助できなかったりして悲しくなることもある。僕のような車いすの人も、健常者と同じように心配や遠慮することなく生活できないものかと考えていたところ、先日テレビで車いすユーザー寺田ユースケさんのニュースを見た。寺田さんは「車いす押してくれませんか？」と声をかけ、車いすを押ししてもらいながら全国を回る車いすヒッチハイクの旅をしている。

寺田さんは、僕と同じ脳性まひのため歩くのが不自由だが、健常者に負けたくないと言いつつ杖を使って生活していた。

しかし、両親のすすめで二十歳の時から葛藤しながらも車いすに乗ると、想像以上の自由に感動し、世界が広がったようだ。そして、「体が動く間に、新しい世界を観る旅がしたい。」という気持ちが芽生えた。また、旅の中で「車いす押してくれませんか？」とお願いすることで、町の中に「気軽な助け合い」を広められるかもしれない。さらに車いすだけでなくベビーカーやご年配の方など、生きづらさを感じている全ての人が気軽に「助けて」と言えるような世の中にでき

たら・・・。と考えるようになったそうだ。今では四百組以上の人に車いすを押してもらいながら、三十を超える都道府県を三年かけて回り、今年四月には香川にも来ていた。

僕は寺田さんのことを知り、僕と同じ障害のある人がこんなに壮大なチャレンジをしていることに驚いた。僕は、いつも人に遠慮をしてしまい、なかなかお願いできない。相手に迷惑をかけてしまうのではないかと思うからだ。しかし、寺田さんは知らない人ともすぐに仲良くなり気軽にお願いをする。僕もそのような明るく前向きに人と関わる姿勢を見習いたいと思った。また、寺田さんから、社会をよくするためには、ただ心の中で思うだけではなく、それを行動に移し、まわりの人に働きかけたり理解してもらったりすることが大切だと学んだ。

今までの僕は、健常者に負けたくない、同じように見てほしいという思いのあまり、自分勝手に、人への感謝の気持ちが欠けていたように思う。中学校では、校舎のあちこちにスロープがつけられ、僕が生活しやすいように段差もなくしてもらった。フェリーにはエレベーターが付き、行く先々でいろいろな人が声をかけてくれる。僕は、まわりのたくさんの人に支えられながら生きているのだ。

では、僕は支えてもらうだけの存在なのだろうか。家族は十三年間僕を支え続けてくれているが、僕も家族の支えになっている（はずだ。）両親は特に口には出さないが、手のかかる僕を愛おしんでくれているのはよくわかる。僕は三つ子で、二人の弟たちに宿題を教えることだってある。そう考えると、一方的に「支える」ということは、ないのではないだろうか。誰かの存在が誰かの支えになる。「お互い様」で人間関係は成り立っているのだ。

だから、僕は素直に「助けて。」と言おう。そして、それを当たり前だと思うのではなく、してもらったことに対して素直に「ありがとう。」と言える人になりたい。困ったときは「お互い様」だ。僕も困っている人がいたら、力になりたい。身体を使って助けることは難しいけれど、相談になら乗れる。僕だって誰かの「大切な存在」になりたいのだ。助けて助けられて、感謝する。それが僕ができる「気軽な助け合い」の第一歩だ。